〔資料紹介・分析〕『小豆島名所図会』にみる近世小豆島の名所

谷崎　友紀
TANIZAKI Yuki

はじめに

本稿は，近世小豆島の名所について考察する際にひとつの手がかりとなる,『小豆島名所図会』を資料として紹介し，基礎的な分析結果を示した.

近世になって旅が盛んとなると，旅先となった各地で名所を紹介した名所案内記（以下，案内記）が出版された．そのなかでも，名所を俯瞰図で描いた挿絵を豊富に記載した「名所図会」シリーズは, 秋里籬島による『都名所図会』（1780）を嚆矢として全国でさまざまなものが作成・出版された．讃岐国を対象としたものでは,『金毘羅参詣名所図会』（1846),『讃岐国名勝図会』（1854）が出版されている．本稿で取り上げる『小豆島名所図会』は，出版に至らなかったものの,『金毘羅参詣名所図会』を作成した暁鐘成が著したものである.

『小豆島名所図会』では，自然景が名所のなかで大きな割合を占めており，名所からの眺望や，風景自体が名所とされていることもある．これは，近世小豆島の名所を考える際に，大きな特徴のひとつといえよう.

『小豆島名所図会』の概要

『小豆島名所図会』は,『香川叢書』3 巻に所収されており，国立国会図書館のデジタルコレクションでも閲覧することが可能である．その基本的な情報については本書の解題に詳しい．以下に, 解題からわかる当該資料の概要を述べる.

『小豆島名所図会』とは，小豆島八十八ヶ所霊場の順番に従い，寺社の縁起や付近の名所・古跡を述べたものである．著者･暁鐘成が『淡路名所図会』（1866）に続けて『西海道名所図会第二編小豆島之部附豊島』として著したものであるが，上梓されずに終わり，版下本が 4 巻 5 冊，兵庫県武庫郡本山村の故高木利太氏の日本地誌文庫に所蔵されていたという．『香川叢書』の編纂がおこなわれた 1939 年時点，高木氏の版下本は所在不明となっていたため，小豆島の森邦夫氏が所蔵していた写本を底本としている．森氏所蔵の写本は挿絵が省略されていたため，小豆郡教育部会が所蔵していた別の写本と，鎌田共済会蔵の挿絵原図をあわせて検討し, 挿絵を補ったうえで採録されたという（香川県 1939).

著者の暁鐘成（1860-1893）は，大坂の読本作家・絵師である．京都を題材とした『花洛名勝図会』（1864）や，金毘羅参詣を主題とする『金毘羅参詣名所図会』（1846）など，小豆島のほかにもいくつか名所図会をはじめとした案内記の作成を手がけている.

挿絵を担当した浦川公佐と松川半山は，ともに大坂の絵師である．公佐は『金毘羅参詣名所図会』（1846）の挿絵を, 半山は同じく鐘成が手がけた『淀川両岸一覧』（1861）の挿絵を描いており，いずれも鐘成と組んで案内記を作成するのは初めてではない．解題によれば，鐘成は『淡路名所図会』（1866）の作成ののちに『小豆島名所図会』を手がけたとあるため,『金毘羅参詣名所図会』（1846）よりもあとの著作ということになる.

名所の記載方法

『小豆島名所図会』に記載されている名所の総数は，359 ヶ所（重複を除く）である．冒頭は，小豆島全体の説明ののち,「坂手浦小嶋湊」から始まる．ここでは,「西国・北国の廻船こゝに泊り，順風を待湊なるゆへ，海船常に出入して繁昌の地なり．原来商漁家多く建列りて最賑わし」との記載があり，坂手浦が当時あった土庄・下村・坂手の「三津」のなかで最も賑わっていたことがわかる．その後, 小豆島を反時計回りにまわるような形で, 西から北, 東の名所を順に紹介する形となっている．ただし，そのなかには, 小豆島の西に位置する豊島の名所も含まれている.

名所の紹介をする際には，歴史書である『日本書紀』や『大日本史』，百科事典の『和漢三才図会』，本草学の学術書である『本草綱目』などを参照して説明をおこなっていることもある．ほかにも,「寺僧云」,「里人曰」といったように，寺の僧や里の人間といった現地の人々から実際に話を聞いたような記述もみられる．鐘成は『金毘羅参詣名所図会』を作成するのに際し，出版の前年に讃岐国を訪

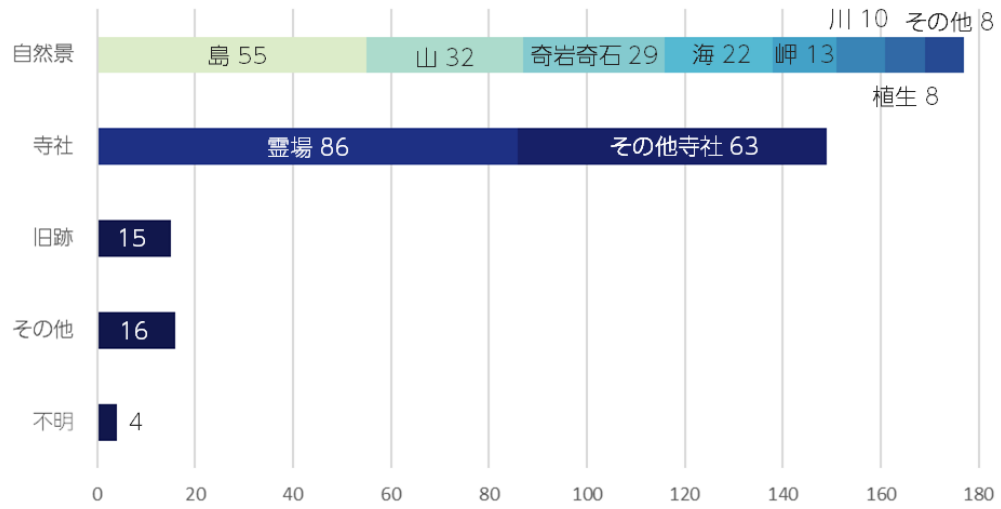

図 1　属性別に示した『小豆島名所図会』に記載された名所

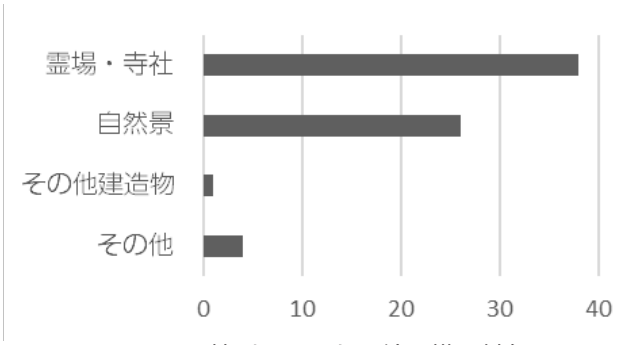

図 2　属性別に示した図絵の描画対象

れて現地調査をおこなっている（柳瀬 1998）．そのため，推測の域を出ないものの，小豆島へも取材へ訪れた可能性が考えられる．

図 1 は，『小豆島名所図会』に記載された名所を属性別に分類したものである．これをみると，近世小豆島の名所で最も多いのは自然景だとわかる．ここには，周辺の島々や島内の山，奇岩奇石，海，岬，川，樹木などが含まれる．島々のなかには，人が住まないような小さなものだけではなく，先述した豊島や，小豆島の南に位置する男木島・女木島といった比較的大きな有人の島も含まれる．

小豆島の奇岩・怪石の風景は，寛政 10（1798）年の帆足万里による『隼山観音閣に遊ぶの記』，翌 11（1799）年の淵上旭江が著した『山水奇観』などによって，江戸後期に徐々に広まっていった（西田 2007）．

『山水奇観』は，淵上旭江が 23 年間の全国遊歴から各地の風景地を写し取った図絵が集められた書物である．対象とした風景は自然であり，日本古来の伝統的な風景観である歌枕の風景ではなく，自然景を見いだそうとする新しいまなざしを捉えることができる（西田 1999）．『小豆島名所図会』にも，このような風景に対する新しいまなざしが反映されていたといえよう．

次に大きな割合を占めるのは，小豆島八十八ヶ所霊場の札所を含む寺社である（ただし，52・71 番については記述がない）．『金毘羅参詣名所図会』（1846）では，名所の構成のなかで最も多かったのは寺社であり，他地域の名所図会や案内記でも，寺社は名所として取り上げられる傾向が強い．小豆島でも同様に寺社の記載が多くみられており，そのなかの半数以上が札所となっている．八十八ヶ所霊場の札所は，小豆島の名所として大きな割合を占めていたといえる．

加えて，小豆島では，ほかの地域で名所として取り上げられることの多い，歴史的なできごとに関わりの深い旧跡や，和歌の詠まれた歌枕といった属性をもつ名所が少ない．旧跡については，南北朝時代の武将・佐々木信胤の立てこもった城跡などがみられるものの，歌枕についてはひとつもない．このような，西田（1999）のいう伝統的な風景観をもつ名所よりも，新しい風景観である自然景を多く取り上げているということが，近世小豆島の名所の特徴なのである．

小豆島の名所と風景

『小豆島名所図会』のなかには，「内海十勝」「神翔山十景」が登場する．これは，近江八景や金沢八景に代表されるような，定数名所と呼ばれるものである．定数名所とは，優れた名所として，三景，八景，十二景，百景などと定数で選ばれた名所のことを指す（西田 1999）．暁鐘成は，『金毘羅参詣名所図会』においても，「象頭山十二景」と「象頭山八景」を取り上げていた（谷崎 2021）．

「内海十勝」は，「洞雲暮鐘」，「碁石山朝霞」，「隼山桜花」，「妙音帰帆」，「亀山明月」，「植松晴嵐」，「清瀧村雨」，「柳橋夕照」，「西村梅花」，「星城暮雪」の十景が選ばれている．これは，現在は市町村合併により小豆島町となっている内

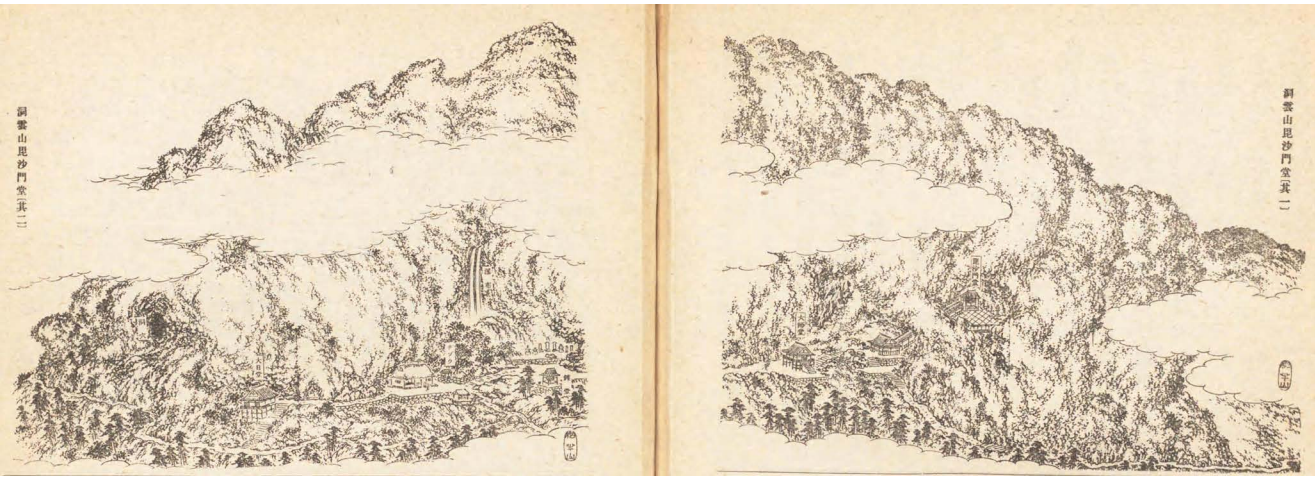

図３　「洞雲山毘沙門堂其一，其二」

出典：国立国会図書館デジタルコレクションより転載

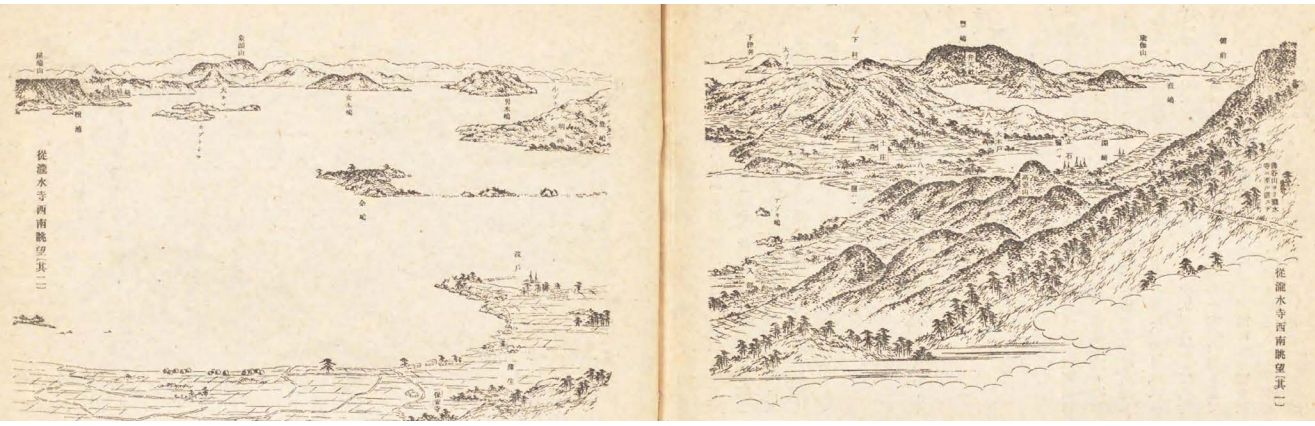

図４　「従瀧水寺西南眺望其一，其二」

出典：国立国会図書館デジタルコレクションより転載

海地区の風景に焦点を当てたものである．

「神翔山十景」については，すべてに名称の記載がないものの，「石窓遠坡」，「星城晩霞」，「布錦渓樵路」，「（飛蟾石）」，「利剣巌枯木」，「（天柱嶺）」，「地軸峯群戯猿」，「大洞嶽仙窟」，「津田海湾」で構成されている．この「神翔山」とは，現在の寒霞渓のことを指す．現在の寒霞渓には，「表十二景」，「裏八景」と称される別の定数名所が存在しているが，これらの名所と「神翔山十景」の構成は異なるものが多い．

このような定数名所に限らず，『小豆島名所図会』には，名所からの眺望を賞賛する文言が多くみられる．例えば，「海上の眺望もつともよろし」（大聖寺），「風景殊に絶勝なり」（花陰亭），「庭前より海上の眺望勝景なり」（松涙庵）などである．

こういった名所については，図絵が付されていることも多い．なかでも，名所から海を望むパノラマ景や，名所の背後にある山や奇岩をダイナミックに描いたものが特徴的である．

このような図絵は，全部で 70 点が確認できる．これは，先述のように（2 章）『小豆島名所図会』の写本を『香川叢書』へ所収する際に，鎌田共済会に所蔵されている松川半山の挿絵原図 70 枚を適当な位置に挿入したものと推察される．名所によっては，1 ヶ所につき 2 枚以上の図絵がある場合もある．

図 2 には，図絵の対象となった名所の属性の内訳を示した．図絵が付されるのは，自然景よりも霊場を含む寺社が卓越する．ただし，実際に図絵をみると，寺社の堂塔伽藍を含む境内を描く図であっても，境内からの眺望や，寺社の背後に聳え立つ山々を描いている図が多くみられる．例えば，洞雲山毘沙門堂の図絵をみると，手前に毘沙門堂の様子が描かれ，その背後には洞雲山が確認できる（図 3）．小豆島は，『名所図会』の冒頭で「此嶋は，南海波涛の中に有て奇峯高く羅烈し」，「原来一嶋中に山岳多く聳へ平地少なし」とあるように，山がちであるため，名所の背後に山が描かれることが多いのは当然である．ただし，図 3 でも，毘沙門堂よりも洞雲山が目立つように描かれており，ここからは自然景である山を強調して描きたいという作者の意図をよみとることができるように思える．

また，図 4 では，瀧水寺から西南方向を望んだ風景が描かれる．この図絵では，瀧水寺の様子にはまったく触れ

られず，家々が建ち並び水田が広がる山麓と，海を望む風景が描かれている．海上には，直島，豊島，男木島，女木島といった島々があり，その先に描かれた陸地には，瑜伽山，下津井，下村など備前国の地名が付されている．図絵の左部には，象頭山や屋島山といった讃岐国の風景も確認することができる．この２つの山は，山容が特徴的であることに加え，象頭山は金毘羅大権現の位置する山であり，19 世紀に入ってからは多くの旅人が訪れていた．また，屋島山は源平合戦の旧跡として著名な場所であった．屋島山の麓に合戦の舞台となった「壇ノ浦」の地名が付されていることからも，それを意識して図絵に描かれたことが推察できる．

このように，『小豆島名所図会』で表象されている小豆島の風景としては，名所の背景に存在する山や奇岩奇石と，島や海といった名所からの眺望が強調されているといえよう．

おわりに

本稿では，『小豆島名所図会』の概要と，本資料からみた小豆島の名所の特徴について，その概観を紹介した．

近世小豆島の名所の特徴としては，周辺の島々や島内の山，奇岩奇石といった自然景が重視されていることがあげられる．そしてその自然景は，「内海十勝」，「神翔山十景」といった，漢文学的な風景の見方の影響を多分に受けたものと，純粋に名所や名所からの眺望を楽しむものの２種類がみられた．

今後は，鎌田共済会が所蔵している，松川半山の挿絵原図である「讃岐小豆島名所画」の絵画分析をおこない，近世小豆島の風景についての実態を明らかにするとともに，近世の名所観，風景観についても検討を進めていきたい．

資料

暁鐘成『小豆島名所図会』（『香川叢書３巻』香川県）．

文献

香川県，1939『香川叢書３巻』香川県．

谷崎友紀，2021，「近世讃岐の名所と金毘羅参詣に関する基礎的な研究――『金毘羅参詣名所図会』を対象として」『観光振興研究』せとうち観光専門職短期大学，1（1），65-72．

西田正憲，1999『瀬戸内海の発見――意味の風景から視覚の風景へ』中央公論新社．

――――，2007，「瀬戸内海における漢文学のまなざしに見いだされた風景」『ランドスケープ研究』日本造園学会，70（5），365-368．

柳瀬万里，1998，「解説」暁鐘成『版本地誌大系 19 金毘羅参詣名所図会』臨川書店：514-525．

（受理日：6 月 15 日）

（せとうち観光専門職短期大学・助教）

E-mail: yuki-tanizaki@g.seto.ac.jp